

風邪は治ったのに、せきが続く—

「せきぜんそく」疑って

風邪は治ったのに、せきが続く。せき止め薬を飲んでも治まらない。そんな慢性的にせきが続く病気の1つが「せきぜんそく」だ。県内でもこじつした症状に苦

「放置せず受診を」三浦院長

しむ患者は多い。放置していると、本格的なぜんそくへ移行する可能性もあり、長引くせきには注意が必要だ。

外旭川病院(秋田市)の三浦進一院長(呼吸器内科医)

によると、せきぜんそくは「ヒューヒュー」「ゼーゼー」といったぜん鳴はななく、8週間以上せきが続く。他に▽季節の変わり目に症状が出やすい▽夜間から明け方にかけて発作的に出ることが多い▽一般のせき止め薬はあまり効果がない▽温度差、たばこの煙などで悪化しやすいといった特徴がある。

患者は年々増加しているとされる。子どもでは男児にやや多く、成人では女性に目立つ。アレルギー性鼻炎などのアレルギー症状がある人も多い。

特に冬は空気が乾燥するほか、エアコンの使用でハウスダストが舞ったため、突然激しいせきが出ることもある。インフルエンザや風邪の流行期

でもあり、せきはそのせいで思い込んで放置し、悪化させてしまつ人も多いという。

せきぜんそくの患者の約3割は、後にぜん鳴や呼吸困難を伴う気管支ぜんそくになるという。「ぜんそくの前段階」ともいわれる。

発症のメカニズムはこうだ。ハウスダストやたばこの煙など気道を刺激する物質や風邪などのウイルスが入り込み、気道の粘膜に炎症が起きる。いったん修復されても、炎症と修復が繰り返されるうちに気管支平滑筋が肥大化。気道がだんだん狭くなって元に戻らず、わずかな刺激にも敏感に反応するようになってしまう。ぜんそく発作へとつながっていく。

悪化させないためにも、日頃から▽マスクを常用するな

どして風邪など感染症にかからないようにする▽たばこは吸わない、煙に近づかない▽酒を飲み過ぎない▽ハウスダストなどのアレルギー物質を生活環境から取り除く—といった注意が必要だ。

胸部エックス線撮影や血液検査、肺機能検査、聴診などで診断するが、では、どのように治療するのだろうか。

三浦院長によると症状に応じて、狭くなった気道を広げ

る気管支拡張薬、気道の炎症を抑える吸入ステロイド、両者の薬効を併せ持つ合剤(吸入)の3種類のいずれかを処方する。中でも吸入ステロイドは効果が早く表れることが期待でき、気管・気管支に直接作用するため副作用もほとんどないという。

治療の際の注意点として、三浦院長は「ひとまず症状が治まった段階で治ったと勘違いして、すぐに薬をやめ、ぶ

り返す人も多い。徐々に使用頻度を減らすなどしなくてはならない」と強調。「せきぜんそくの認知度はまだ低いが、放置して気管支ぜんそくに移行すると大きな発作につながり命にも関わる。早期治療が大切なので、せきが止まらず苦しんでいる人は、そのままにせず専門医に相談を」と呼び掛けている。

(喜田良直)

